

神経伝導速度(MCV・SCV・F 波)		S122		
神経伝導速度		担当部署 生理		
検査オーダー				
患者同意に関する要求事項		該当なし		
オーダリング手順	1	電子カルテ→指示①→生理→神経伝導速度検査→神経伝導速度・上肢下肢(MCV・SCV・F 波)		
	2	電子カルテ→指示①→生理→神経伝導速度検査→神経伝導速度・上肢(MCV・SCV・F 波)		
	3	電子カルテ→指示①→生理→神経伝導速度検査→神経伝導速度・下肢(MCV・SCV・F 波)		
	4	電子カルテ→指示①→生理→神経伝導速度検査→神経伝導速度・上肢下肢(MCV・SCV)		
	5	電子カルテ→指示①→生理→神経伝導速度検査→神経伝導速度・上肢(MCV・SCV) or 神経伝導速度・下肢(MCV・SCV)		
検査に影響する臨床情報		肥満、四肢冷感、糖尿病、末梢神経障害など		
検査受付時間		8：45～17：30		
検体採取・搬送・保存				
患者の事前準備事項		1) 電気刺激を行うことにより痛みを伴うことを説明する。 2) 両腕、両足を出してもらい、ベッドに仰臥位にならう。		
検体採取の特別なタイミング		特記事項なし		
検体の種類	採取管名	内容物	採取量	単位
1 患者(上肢、下肢)	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
検体搬送条件		ベッド不可		
検体受入不可基準		1) 検査協力が得られない患者		

	2) ベースメーカー植え込み患者 3) 検査に同意を得られない患者
保管検体の保存期間	特記事項なし

検査結果・報告

検査室の所在地	病院棟 3 階 中央検査部
測定時間	3 時間
生物学的基準範囲	[部位][振幅 (mV)][潜時 (ms)][伝導速度(m/s)] 正中神経 運動神経検査 [手関節][7.0±3.2][1.86±0.28][伝導速度無し] [肘関節][7.0±2.7][7.39±0.34][57.7±4.9] F 波 [手関節][振幅無し][26.6±2.2][65.3±4.7] 感覚神経伝導検査 [手関節][38.5±15.6][2.84±0.34][56.2±5.8] [肘関節][32.0±15.5][6.46±0.71][61.9±4.2] 尺骨神経 運動神経検査 [手関節][5.7±2.0][2.59±0.39] [肘関節下][5.5±2.0][6.10±0.69][58.7±5.1] [肘関節上][5.5±1.9][8.04±0.76][61.0±5.5] F 波 [手関節][振幅無し][27.6±2.2][65.3±4.8] 感覚神経伝導検査 [手関節][35.0±14.7][2.54±0.29][54.8±5.3] [肘関節下][28.8±12.2][5.67±0.59][64.7±5.4] [肘関節上][28.3±11.8][7.46±0.64][66.7±6.4] 脛骨神経 運動神経検査 [足関節][5.8±1.9][3.96±1.00][伝導速度無し] [膝関節][5.1±2.2][12.05±1.53][48.5±3.6] F 波 [足関節][振幅無し][47.7±5.0][52.6±4.3] 腓骨神経 運動神経検査

	[足関節][5.1±2.3][3.77±0.86][伝導速度無し] [膝関節下][5.1±2.0][10.79±1.06][48.3±3.9] [膝関節上][5.1±2.0][10.79±1.06][52.0±6.2] F 波 [足関節][振幅無し][48.4±4.0][49.8±3.6] 腓腹神経 感覚神経伝導検査 [外果より 14cm 上部]10~40 歳 [20.9±8.0][2.7±0.3][52.5±5.6] [外果より 14cm 上部]41~84 歳 [17.2±6.7][2.8±0.3][51.1±5.9]				
臨床判断値	該当なし				
基準値			単位	特記事項なし	
共通低値	共通高値	男性低値	男性高値	女性低値	女性高値
特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし	特記事項なし
パニック値	高値	設定なし			
	低値	該当なし			
生理的変動要因	年齢：新生児の NCV は成人の約 1/2 である。5 歳前後で成人の値に近づく。一方 40 歳を過ぎると低下するが、低下の程度は 80 歳までは 10m/sec 以下である。 皮膚温：体温が 1℃ 低下すると NCV は 2m/sec 遅くなる。そのため、皮膚温は 26～32℃ に保つ必要がある。 刺激の強さ：刺激を漸次強くすると M 波の振幅は漸次高くなり、潜時は短くなる。そのため検査では M 波の振幅が最大になる刺激を与える。通常の検査では最大上刺激を与える。				
臨床的意義	神経伝導検査では伝導速度、振幅、持続時間、遠位潜時など測定し、末梢神経疾患の診断に用いられる。主な病変が、脱髓によるものか、軸索変性によるものかの鑑別を行うが、局在での神経障害を確定するためや、特殊な神経障害を示す神経炎などの鑑別にも有用である。更に、末梢神経以外の障害部位になりうる前角細胞、神経・筋接合部、筋線維、および、上位中枢の評価にも有効だと言われている。				